

夢がかなう

IPMU 機構長

村山 斉 むらやま・ひとし

IPMUはそれ自身とても野心的なプロジェクトです。とても短期間にゼロから出発して一流の研究所を作ろうとしています。宇宙の深い謎を解くという共通のゴールに向かって違った分野 — 天文、物理、そして数学 — の研究者と一緒に仕事をしないとイケません。日本で今までなかったような真に国際的な研究所を目指しています。この野心的な試み全てに共通した必要なものが一つあります。注意深く目的に即してデザインされた、魅力的な仕事場です。

ついにIPMUの研究棟が完成し、私たちの「家」ができました。それだけでなく、この建物は私たちの野心を実現するために大きな役割を果たすと思っています。建物のデザインを担当された大野先生が今号で述べられているように、この建物には私たちの目的のためにとってもユニークなアイデアが数多く取り入れられています。

まず、全てのオフィスが3階から5階まで螺旋状に並べられており、三つの階を実質上一つの階のようにしています。この配置は、違う階の住人に滅多に会うことがないという、普通の建物にありがちな問題を解決しています。オフィスの配分では違う分野の人を意識的にごちゃ混ぜにします。そしてこの螺旋配置は研究者全員を「横並び」にします。この「フラットな」組織には、若い研究者が大きな謎に取り組めるようにできるだけもり立てるという目的があります。

二つ目に、螺旋状に並ぶオフィスの真ん中に天窓に覆われた大きな交流スペースがあります。自然光に満たされ、驚く程柔らかく暖かい感じがします。違う分野、文化、言語、そして専門知識を持つ研究者が問題と答を共有する場所がここなのです。家具もとてもカ

ジュアルでインフォーマルな雰囲気を作り、自然に議論が始められるように工夫して選ばれました。そして研究所の全員がここで毎日3時にお茶の時間に集まります。勿論エスプレッソ・マシーンが置かれ、ヨーロッパの街の広場に並ぶカフェのような感じです。そしてなんとオベリスクまであるのです！足りないものといえば噴水くらいでしょうか。

三つ目に、異なる文化、言語、そして体のサイズの人たちが心地よく暮らせるようにできるだけ工夫しました。全ての表示は英語が日本語の先に来ます。天井は普通の日本の建物より高くして背の高い人にも圧迫感のないようになっています。部分的に間接照明を使い、光に敏感な人に配慮しました。そして冷暖房は各部屋別々に操作できます。

最後に、キャンパスの他の建物とマッチするように外側は打ちっぱなしのコンクリートですが、内側は明るい色の木をそこら中に使って、くつろいだ暖かい心地よい雰囲気を作り出しています。あちこちに小さなミーティングやセミナーができる空間があり、大ホールもあります。この研究棟ではいたるところで仕事ができるのです。

夢がついにかないました。こんなに魅力的な仕事場があれば、世界中の人たちがIPMUに来てみたいと思うことでしょう。こうして世界で一流の研究所になるための大きな一歩を踏み出すことができました。

